

題目 ごみステーションの適正度と社会的ネットワークとの関連
—ごみステーション観察調査と擬似実験的調査から—

氏名 石原あず沙

指導教官 大沼進

家庭ごみの収集所(ごみステーション)における、夜間排出やポイ捨て、分別されていないごみの排出といった問題に対し、地域コミュニティでは対応が求められている。割れ窓理論(Kelling, 1996)によれば無秩序が放置された状態は重大犯罪を呼び込むとされるが、ごみステーションにもこれと似たような特徴があると考えられる。本研究では、社会関係資本(Putnam, 1993)でいう人々のつながりが、ごみステーションの適正排出と関連することを明らかにするために調査を行った。

まず、札幌市内のごみステーションと地域の観察から、排出状況がとくにきれいなステーションがまとまっているエリアと、逆に不適正排出の多いステーションがまとまっているエリアを選び出し、両極端なエリアを有意抽出した疑似実験的な調査を計画した。また抽出したごみステーションの不適正ごみ数の観察データからごみステーション不適正度指標を作成した。さらに地域の観察から地域コミュニティのきれいさの印象に関連しそうな指標(以下マクロ指標)を作成した。

本調査は、対象ステーションを利用していると思われる住民に対し、質問紙回答を訪問依頼・郵送回収で行った。質問紙では、自身の排出行動・ごみ排出に関する情報の認知・人付き合いの人数および程度・活動への参加度・基本属性などの項目について尋ねた。応諾率は2割であった。

個人レベルの分析によって、ごみの不適正排出行動と近所づきあいの程度に関連がみられた。次にステーションレベルの分析によって、ステーションの排出状況の適正度と地域内における人づきあいの平均値との関連が見られた。最後に地域のマクロ指標項目のうち、公園や学校などの公共施設の有無や高齢者・子供・親子連れが歩いているといった項目を「人の賑わい指標」、立て看板・掲示物の有無や、町内会役員宅や家庭菜園・花壇の有無といった項目を「地縁的指標」と分けエリアレベルの分析を行った。その結果、両指標ともステーションの不適正排出を抑制するものの、「地縁的指標」は、ステータスの高さや町内会加入の有無や居住年数の長さに左右されてしまう一方、「人の賑わい指標」はそうした要因に左右されなかった。これは、近所づきあいがいない人、若年層、常時雇用者、町内会未加入者、賃貸マンションに住む単身者であっても、「人の賑わい」がコミュニティにあればステーションへの適正排出行動をとる可能性を示唆している。